

Problem Solving

# Case 5



学習支援・ごはん亭

## 山芋の会

南区

課題1 | 活動内容・活動方法

課題2 | 支援者の関わり

課題3 | 協力ネットワーク

課題4 | 資金と場の確保

# 山芋の会 山芋のような粘り強い、生活力のある子どもに育てたい！



山芋の会は、弘明寺駅近く、奥まった古いアパートの1階、1DKの1室。そこで小学生、中学生を対象にした学習支援を週4日実施しています。子どもたちにとって自然との触れ合いが大切と考え、魚釣りやキャンプなどの体験も月1回行っています。

昨年秋までは週1回の夕食の提供も行っていました。残念ながら大家さんの都合でこの場を3月末で立ち退かなくてはならず山芋の会としての活動は閉じることになりました。今後は別の場で、新たな活動を始める予定です。

この方にお聞きしました

PROFILE

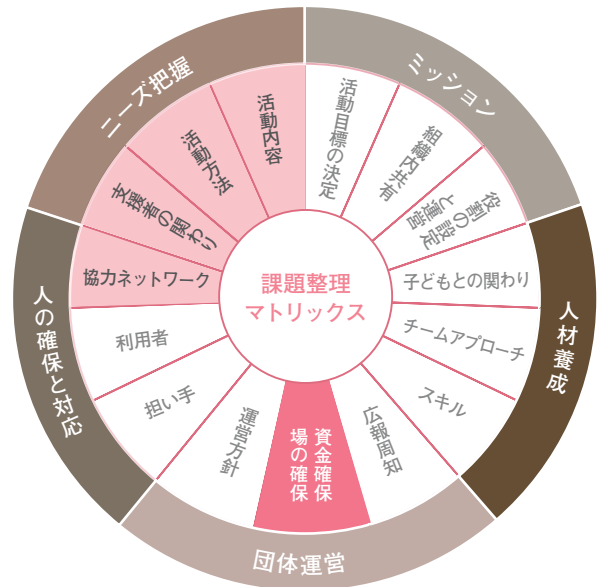
伊藤 富美恵さん (69歳)



学生時代より女性問題に興味をもつ。  
1980年、28歳の時、戸塚区の古民家で7人の子どもの対象にした学童保育の指導員となる。8年位の間に、通ってくる子どもは50人以上に増えたが、運営のあり方に疑問を感じ退職。  
その後、41歳の時、再び南区の学童の指導員となり、20数年勤めたが、社会における学童保育の役割と実際の姿に違いを感じるとともに、学校の勉強についていけない子どもの問題が気になり、そのような子どもたちを支える学習支援を行うために「山芋の会」を立ち上げ今に至る。

活動のきっかけ

20年以上、学童の指導員をしている間、社会は変化し続け、家庭や子どもの暮らしは様々な影響を受けていました。働く女



性が増え、結婚・出産後も仕事を続けることが次第に当たり前になり、働きながら家族を守り、子どもを育てるという暮らしに時間も心も奪われ、余裕のない親が増えました。子どもにとっても、家庭という場の安心感が奪われているように思いました。一方、このような社会を背景に、学童保育のニーズが高まり、子どもの受け入れを拒まない学童は、急激に大規模化し、ひとり一人の子どもに丁寧に関ることができなくなっていったように思います。

共働き家庭の子ども達を放課後預かり、家庭の補完としての役割を果たそうとしていた学童保育が、物理的な預かりには応えられても、本来の役割が果たしにくくなっていることはとても残念なことであるし、子どもを育てる場である家庭・学童保育が共に課題を抱えることになっては、子どもたちに大きな不利益が生じると感じました。

しかしながら、通勤に時間がかかる、残業があるなど勤務先の課題や収入確保のための長時間労働やダブルワークは避けられないなど、親の働き方は多様化する一方です。また、家族形態についても核家族化は一層進み、一人親家庭も増加し続けています。

経済状態は子どもの暮らしに大きな影響を与えますが、経済的には恵まれていても、両親ともに勤務地が遠かったり、労働時間が長いなどの状況がある場合、子どもが一人の時間を、習い事や塾などを利用することで解決しようとする家庭もあり、

## 団体概要

所在地 南区六ッ川1丁目 山之井荘1階  
開設年月日 2015年4月  
スタッフ 3名  
活動内容 □小学生・中学生の学習支援  
週4回(月・火・水・木) 16:30～  
会費500円 月謝(5000円～)

- 夕食の提供(現在休止中)  
毎週金曜日 18:00～ 1食500円  
会費500円 月謝(5000円～)
- 自然体験(ハイキング、釣り、キャンプなど)  
毎月1回、夏休み

子どもはとても忙しく、親子で過ごす時間が少ない子どもがいます。また、経済的に厳しい家庭では習い事や塾にも行かせられないし、学力も遅れがちになり、親も子ども、助けを求められず、学童保育での長時間保育に依存し、心身ともに疲れた親と学童保育から帰り遅い夕食を食べる。そんな家庭や子どもをたくさん見るようになりました。

### たくましい子どもに育って欲しいから 学習支援「山芋の会」誕生

2015年4月、元学童保育の指導員3人と6畳一間を借りて、子どもの学習支援を始めました。立ち上げに当たり、区役所に、利用する子どもの紹介等をしてもらえないかと相談に行きましたが紹介は難しく、勤めていた学童で、毎日親の帰りが遅い子ども等に学習支援に行ってみないかと声をかけてもらうようにしました。

現在の山芋の会の活動場所は、学童保育のOBが紹介してくれたアパートの1階です。「山芋の会」という名前は、「山芋」はとても生命力の強い植物で、田舎の山にも、そして都会のコンクリートの隙間からも生えるたくましさがあること。また、大関松三郎の詩集の「山芋」が大好きだったことからつけました。

### 子どもにとっても保護者にとっても 居心地よく温かな場でありたい

学習支援は月・火・水・木の週4日、16時半から小学生の国語と算数、18時半から中学生の英語の学習をしています。現在は小学生が10名、中学生は4名参加しています。保護者の方と面談してから利用してもらうようにしています。

2015年7月から毎週金曜日の夕方、「ごはん亭」を始めました。保護者も含め15～18人が参加し、ぎゅうぎゅう詰めですが、大家族の夕ご飯という感じです。学校が終わったら、「山芋の会」で週4回勉強をして、週1回はみんなでご飯を食べる。そして毎月1回、みんなで自然体験としてハイキングに出かけたり、釣りをしたりします。「同じ釜の飯を食べた仲間」といいますが、一緒に体験し食事をする子ども同士、保護者同士、仲間意識が芽生え、つながりが生まれます。

貧困問題が子どものいる家庭に増えていますが、経済的な貧困ばかりが課題ではありません。食生活・学習環境・基本的な生活習慣など複合的な課題があります。

「山芋の会」は、子どもや保護者との関係を大切に、課題を予防すると同時に、子どもや保護者を地域から孤立しないよう、様々な活動を行っています。

「山芋の会」や「ごはん亭」が、子ども達に寄り添おうとしている私たちと共に、生活に根差した居心地よく、楽しく気が抜ける場所であることが一番と思っています。また、働く母親にとっても安心できる場でありたいと思っています。

## 課題1 | 活動内容・活動方法

### I 子どもの生活課題対応と保護者支援



#### 子どもも保護者も抱える生活課題

#### 具 体 策

##### ①保護者と共に考えにくくなった子どもの放課後

学童保育は、子どもたちが安全に安心して過ごせる居場所です。1980年頃の、共同保育時代には、どのような学童保育であれば子どもにとってより良い学童保育なのか、保育内容や運営方法を指導者と保護者が一緒に考え、協力して運営していました。当時は、保護者の働き方も今は違っていたし、学童保育を利用する子どもは今ほど多くはなく、親も子ども地域とのつながりがあったように思います。

保護者が主体的に我が子や地域の子どものことを考えること、また、親同士、時には支援者と共に子どもたちのことを考え、より良い環境を創ることは、子どもたちのためだけではなく、保護者の養育力を向上させ、地域からの孤立も防ぐことになると思います。まだ解決には道なかばですが、「保護者と共に」を大切に考え続けたいです。

##### ②居場所が多様化するなかで居場所のない子どもたち

横浜市の学童保育は、毎月18,000円程度の費用がかかります。放課後、子どもを預ける場へのニーズが高まる一方、この費用負担が厳しい家庭も増えています。

横浜市には、各小学校に「放課後キッズクラブ」という居場所があり費用負担も低いため利用する子どもも多くなっています。どんな居場所も、子どもたちが毎日通い続けたい場所とならないことがあります。何となく馴染めない。だから、いつの間にか行かなくなってしまった。行かなくなっても、どう

して来ないと気にされることもない。などの話を聞くことがあります。

家に帰っても家族がおらず、居場所のない子どもたち。コンビニ等、町の中をさまよって買い食いをしたりしながら過ごす子どもの姿を観ると、「居場所」の必要性と在り方を深く考え取り組んでいくことが大切と考えています。

### ③子どもはもちろん保護者にも必要な社会的支援

保護者の労働状況が変化中、労働時間の長期化は子どもに大きな影響を与えています。保護者の帰宅時間が遅くなることで、子どもが一人である時間が長くなります。習い事や塾に通っている経済的にゆとりのある家庭もありますが、それはそれで、子どもは毎日忙しくなります。遅い時間に帰宅する保護者は心身ともに疲れ、子どもとじっくり関わるができなくなります。また、子どもには自覚しにくい不安や心の貧しさのようなものに、保護者が気づけなくなり、いつのまにか子どもの心身の健康が脅かされることさえあります。こういったことから、子どもにはもちろんですが保護者にも寄り添った支援が必要だと思うのです。

そこで考えた活動が、夕食の提供をする「ごはん亭」です。子どもだけでなく保護者も兄弟も参加して、ワイワイ楽しく食事をする、家庭では味わえない大勢での夕食の提供です。できるだけ旬の食材を使って、栄養バランスを考えたメニューにしています。お米以外はあまり寄付に頼らず、どうしてもみんなでの食事を実現したく、自前で食材を購入して作っていました。

子どもの問題には、親の問題も同時にあり、親への支援も大切ですが、大人はなかなか変わることはできません。だから、優先すべきは子どもと考えています。お腹を空かせている子にご飯を提供し、勉強についていけない子には、学習の支援をしようと考えています。

但し、制度にも考えて欲しいと思うことがあります。横浜市は、子ども食堂を始める団体には市が支援（経済的）するという話も聞きました。市民活動の必要性があると考えているからとは思いますが、子を支え、親も同時に支えるには、「中学校の給食」を実現することは重要なことだと思っています。これは育ち盛りの中学生の健康を守り、経済的な負担だけでなく、時間や肉体的な親の負担を減らし、何よりも子どもが安心

して学校に来られます。不登校も減るかもしれません。子どもが安心して暮らし、食べ、成長することは、子どもの権利であり守るのは国の責任だと思います。

\*ごはん亭は、メンバーの体調不良があり、昨年10月から休止しています。

## Ⅱ 不足する生活体験、自然体験



### 生活体験・自然体験を子どもたちに

#### 具 体 策

##### ①さまざまな生活体験を活動の中で

山芋の会では体験を大切にしています。15年ほど前、学童保育の指導員だった頃、子どもたちと工具を使って自転車を解体してみたり、プロミスリングやビーズ細工など、男女問わず楽しく作って、バザーなどに出品したりしていました。最近は手先を使って物をつくるなどの機会が減っているのか、手先の仕事が苦手な子どもが増えているように感じます。

また、自然の中で遊ぶ経験も減少しており、自然を活用した遊びも知りません。月1回のハイキングや魚釣りなどの自然体験は、一つのニーズと捉えて取り組んでいます。自然体験は、藍染め体験、羊毛からの織物づくり、家庭ではなかなかしなくなった味噌づくりや梅干しづくりなど、さまざまに発展して、みんなで楽しんでいます。

##### ②教科学習以外の経験が子どもの生きるチカラを育てる

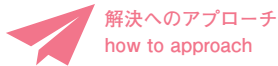
夏休みにはキャンプに出かけます。自分たちで炊いたご飯と自分たちで作った梅干でおにぎりを作って食べます。自然の中で、火やナイフを使う体験は子どもの生活力を高めます。

たくさんの体験をして、その成功体験が子どもに自信をつけ、体験から自分の将来や夢が生まれてくると、子どもたちを観ていて実感します。自然体験のプログラムは、生活の基本を身に着けることを促し、生きるチカラを育てていくと考えています。



## 課題2 支援者の関わり

### I 子どもとの関係のもちかた



#### 安心できる支援者と子どもとの関係づくり

#### 具 体 策

##### ①居場所に来ることが第1歩

中学生の学習支援を始めて、初めに来たのは不登校の子どもでした。彼はここでは勉強はせず、本を読んだりしながらごろごろ過ごしていました。寝転んですごせるというのは安心できているからかなと思っていましたが、継続して通い続けていました。次第に、釣りが大好きなことが分かり、釣った魚のさばき方を教えると、それが特技になりました。ここでも魚をさばいてくれます。誕生日にはおじいさんにリクエストして包丁をプレゼントしてもらったそうです。

##### ②子どもが育つ環境を知り

###### 子どもの心身の成長に寄り添うこと

今時の社会は、情報過多、ネット社会などと言われています。常にせわしなく、情報が行きかう中に子どもたちもいて、それは、子どもにとって、当たり前環境になっているかもしれないけれど、自分の心や体をゆっくりと育てる環境が失われていると感じています。周りの大人は、子どもにゆっくり寄り添い、子どもの成長を見守り、支えることが求められていると思います。「山芋の会」はそれを実現したいと考えています。

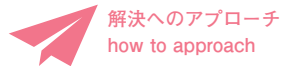
##### ③子どもたちの様子や会話から理解を深める

子どもたちは「山芋の会」で、親の前では言えないことや学校では話さないだろうことも子ども同士でおしゃべりします。その会話の中に、学校でのいじめや虐待、先生のことなど、気になるキーワードが出てくる場合もあります。それとなく耳を傾けて聞いていますし、何かの時のために、気になることはメモを取っ

ています。そして子どもの普段の様子には気を付けるようにしています。

## 課題3 協力ネットワーク

### I 専門職とのネットワーク



#### ネットワークを活用した子ども支援

#### 具 体 策

##### ①継続的な利用のための連携支援

立ち上げ期は、行政とのつながりも得られないまま行っていました。南区の子ども食堂ネットワークなどで、「山芋の会」の活動を知った区役所の子ども家庭支援課をはじめとする様々な機関から、子どもの紹介が来るようになりました。しかし、残念なのは、子どもに意志があっても保護者の考え次第で継続的な利用にならない場合があります。なんとか子どものために、継続利用できるよう多機関で協働で支えられたらと思います。現段階では難しいです。

##### ②重い課題を抱える子どもへの対応

夜間、携帯が鳴り、無言電話の向こうに大変気になる状況や子どものSOSを感じる場合があります。不定期に「山芋の会」を利用する子どもの中には、家庭環境に明らかに問題があり、食事満足に取れていない子どももいて、相談機関に連絡を入れたこともありましたが、相談機関には、子どもの氏名・学校名など、事務的な情報を次々と尋ねられました。やり取りをしながら、この電話が子どもにとって不利益がもたらされないか、むしろ不安になり、詳細を話すことにためらいを感じました。このケースに関しては、電話対応の相談員の方が、「また電話します」と言われ待っていましたが、連絡はありません。子どもにも保護者にも、それを支援する私たちのような団体にも、共に考え、寄り添ってくれる相談機関が必要なのではと思います。



梅干しを作る作業をみんなで体験しながら覚えていく。



みそ玉を一生懸命丸める。自分で作るとまた格別に美味しい。

## 課題4

## 資金と場の確保

### I 失ってしまう活動の場



解決へのアプローチ  
how to approach

#### アパートの閉鎖と共に失われる活動の場

#### 具 体 策

##### ①資金なく、場も失う「山芋の会」

現在のアパートは格安の家賃で借りていますが水道光熱費は発生します。運営は社協のふれあい助成金と、学習支援の月謝、ご飯は参加費でなんとかやってきました。キャンプや行事の経費はバザーなどで賄ってきました。

狭いながらも子どもたちにとってはくつろげる場でしたが、大家さんの都合でこの3月でアパートは閉鎖されることになりました。活動の継続のために近隣で物件をいろいろ探しましたが、残念ながら適当な物件は見つかりませんでした。仕方なく弘明寺からは一旦撤退することとなりました。

細々とですが5年間、子どもと関われたことは子どもたちにとっても私たちにとっても大切な時間でした。現在参加している子どもたちや、長い間支えてくださった保護者の方には申し訳ないのですが、「山芋の会」のような活動にとって、資金と場は最大の課題です。

##### ②「子どもの居場所」のための公的な支援の期待

空き家、空き部屋はたくさんあっても、こうした取り組みに使うためには、高いハードルがあります。子どもや保護者を支援するために「場」は欠かすことができません。なんとか、必要と認められる取り組みに対して、公的な場の確保の支援（場の提供や家賃補助等）ができないものでしょうか。横浜市には子どもが自由に利用できる児童館がありません。子どもの食の問題も中学校に給食があれば、かなりの子どもの栄養状態が改善されるはずです。

#### 新たな活動の始動

#### 具 体 策

##### ①自治会に子どもの居場所の必要性を伝え続けて

地元の六ツ川団地へ場所を移し活動ができることになりました。自治会に、子ども支援の必要性や居場所づくりの要望を伝え続け、地域の皆様から賛同を頂きました。

また、山芋の会にあるたくさんのお本を団地の図書室に寄付させてもらい、その児童書を利用した活動と学習支援を、連合町内会の活動として、月1回から始めることになりました。

##### ②子ども食堂を始める動きも

子ども食堂の活動も始めたいという動きがあり、形は違っても、一緒にやっていけたら良いと思います。山芋の会を閉じるのはとてもさみしいのですが、5年間よく続けられたとも思います。

あまり大人数でなく、一人ひとりの子どもにゆっくりかわれる、「敷居の低い子どもの居場所」。いつ行っても誰かしら子どもがたむろして親の前では言えないようなことも言い合っ、ふざけ合い、そばにはニヤニヤ聞いているだけの大人がいて、勉強のわからないところがあれば一緒に考えて付き合ってくれる、そして低価格のご飯が食べられる、そんな「居場所」を今後も創ることができたらいいなと思っています。

人は、どこかに属して、アイデンティティが形成されるのだと思います。同じ釜の飯を食い、意見の違う人がいるんだということ認識し、時には身体と心でぶつかり合い、喜怒哀楽を共にし…。自分と他人は違うんだ。でも共に生きていくんだと理解することは、人と人が認め合い、場所や思い出を積み重ねることで育ちます。そして、それは大人になっていくためにとても大切です。孤立や孤独が、人生にとってろくなことにならないということは歳をとってしみじみ思うことです。

#### 取材を終えて

山芋の会は細い路地の奥、街の片隅にある小さな居場所です。利用する子どもも十数名と多くはありませんが、昔の大家族のような雰囲気が子どもにも、そして日々忙しい保護者にも、安心できる居心地の良い場所なのだろうと感じました。

子どもやその家族が抱える様々な問題を受け止めながらも、学習や体験活動を通して、子どもたちの生きるチカラを養い、達成感や自信を得て、どんな環境にも負けない強さを持って生きていけるよう支援していることがよくわかりました。

5年間続けたこの居場所が閉鎖されることは、子どもや保護者にとっても、とても残念なことでしょう。六ツ川の団地での新たな居場所には、大きな期待がありますが、居場所になる「場」が不可欠であることは、本事例に出会い痛切に感じました。

「山芋の会」は大きな場の確保がなかったわけではありません。「山芋の会」が目指す家族的なスタイルがあり、この場合は、会議室や研修室等の公共スペースが必ずしもふさわしいわけでもありません。

伝え方が難しいのですが、少し、閉ざされた場だからこそ、温かくて、安心感があって、帰属意識を持つことができ、家族のように温かく見守ってくれる大人や仲間を感じることができる。そして、そんな場から、子どもの生きるチカラがゆっくりと育てられていくのかもしれない。こうした活動をなんとか継続できる仕組みがつくれないものかと考えさせられました。